

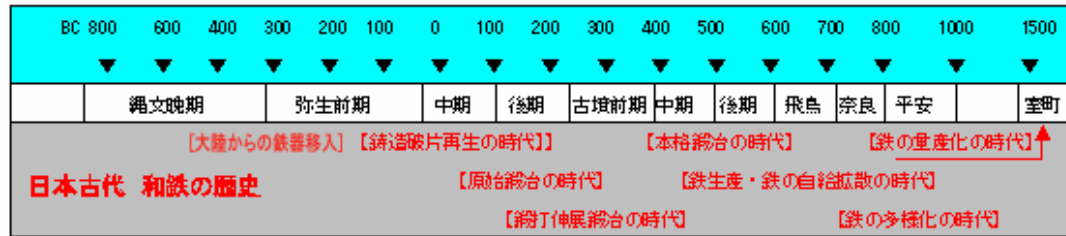
14. 弥生の高地性集落に「弥生の戦さ」・日本人のルーツを探して

2. 弥生時代 農耕社会の展開 と 鉄の役割

インターネット 検索を中心に資料をぬきだしました

「水田稲作」と「鉄」 大陸からの新しい技術・物資・人の流入

－ 日本古代 和 鉄 の 歴 史 －



日本で最古の鉄器は福岡県曲がり田遺跡で出土した板状鉄器と熊本県斉藤山遺跡から出土した鉄斧で紀元前五世紀頃のもので、ちょうど弥生時代の始まり 日本で水田稲作が見つかる時期とほぼ同じ時代である。

いいかえれば、稲作の展開には鉄が不可欠であり、鉄と稲作の技術を持った人々が大陸から日本列島にわたり、鉄器文化・農耕文化の幕が開いたと考えられる。弥生時代は農耕社会。各地の遺跡から様々な農具が出土しており、水田の跡も佐賀県唐津市菜畑遺跡、福岡県福岡市板付遺跡、静岡県静岡市登呂遺跡などで発見されている。また、農具は「土を耕す道具（鋤・鍬等）」、「収穫する道具（石包丁・鎌等）」、「脱穀する道具（臼・竝杵等）」に大きく分けられ、既に現在にまでつながる基本的な農具がほぼ全て揃っていた。

そして、弥生時代の前期には鋤や鍬も刃先まで木製であったが、中期以降、先端に鉄の刃先を装着するものが出現。収穫具も中期後半から後期になると石包丁など穂先を摘み取って収穫するものから、根元を刈る鎌に変化していった。



鉄製農具

(鋤先および鍬先・佐賀県吉野ヶ里遺跡出土)



収穫する道具

(石包丁・佐賀県吉野ヶ里遺跡出土)



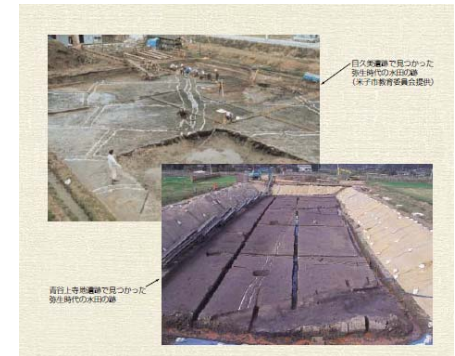
鋤柄 鍬先 鋤・鍬の刃先 田下駄 表 裏



鉄鎌

このような農具の変化が農耕の更なる生産性の向上をもたらし、人口を爆発させ、小さな集落集団の社会から地域社会そして国へと社会を大きく発展させていった。そして、この過程で「戦さ」が起こり、その備えとして、集落は環濠をめぐらした大型集落・周囲を見渡し異変を監視する高地性集落を生む。

また、弥生時代は日本の国づくりの黎明期 大きな変革の時代であり、鉄器の幕開けの時代であると共に、中国・朝鮮との交流を通じて、東アジアの社会に登場する時代でもある。



## ■ 弥生時代 各地の鉄器と鍛冶加工

弥生時代後期の鉄器出土数

	刀剣	鏃	工具	農具	伐採	他	小計	不明	総数	備考
福岡	83	388	500	258	213	61	1503	243	1746	
熊本	17	377	189	158	45	37	823	1068	1891	
佐賀	26	47	91	85	69	19	337	28	365	
島根	3	32	56	13	17	82	203	20	223	
鳥取	26	67	224	34	76	88	515	149	934	上寺地270
岡山	13	120	105	18	17	18	291	144	435	うち94点は県北部
兵庫北部	18	50	72	0	7	15	162	7	169	
兵庫南部	11	30	22	0	6	20	89	22	111	
京都北部	49	103	53	1	1	10	217	17	234	
京都南部	1	6	9	3	2	9	30	4	34	
大阪	3	32	19	3	14	16	87	66	153	

弥生後期の鉄器出土数  
(藤田憲司「見えざる鉄器」『究班』Ⅱ 2002年9月を一部改変)

山陰の鉄



妻木晩田遺跡出土の鉄器群



青谷上寺地遺跡出土鉄器群

日本の鉄加工は九州の玄海灘沿岸で始まり、ここを中心に発展していく。九州のほかの地域は、弥生時代後期になると、玄界灘沿岸部とほとんど同じ完成された状態になる。その吸収で熊本県の鉄器の出土が非常に多く注目される。熊本県で鉄器工房跡が発掘された西弥護免遺跡は、4重の環濠を持つ大環濠集落である。

また、宮崎県延岡市でも、鉄器を加工した遺跡が見つかっている。

瀬戸内海の西部については、東北部九州に準ずる状態であるが、瀬戸内海東部は、生産の技術も密度も九州などに比べるとかなりの差があるということになる。

近畿地方でも、多くはないが、鉄器は出土する。しかし、大和朝廷発祥の地といわれる奈良県の鉄器出土は、かなり少ない。

山陰地方は、九州に匹敵するくらい鉄器の普及は、進んでいたものと思われる。

弥生時代後期の平田遺跡(島根県木次町平田)などの鉄器工房跡が発掘されている。

九州や山口では、高温溶解が出来る高性能な炉も出現し、鍛錬だけでなく、製錬まで行われていた可能性がある。

一方 弥生時代 日本での製鉄はまだ行われておらず、鉄の素材はほとんどすべて輸入品と考えられ、玄関口である玄界灘沿岸から離れた熊本県や山陰地方での鉄器の出土が多いというのは、独自に鉄を調達する経路を持っていたと考えられ、注目に値する。

《原の辻遺跡 鉄器・青銅器 農具 》弥生時代中期後半（紀元前1世紀～紀元前後）



上段左…鉄鎌 右…鋤先  
中段左…鉄鎌 右…刀子  
下段左2本…鉄斧 右2本…鋤先

（紀元前1世紀～紀元前後）



青銅製鋤先  
弥生時代後期～古墳時代前期



鹿角製柄付刀子  
弥生時代中期後半

『魏志倭人伝』に記載のある「一支国」の中心集落跡として知られる。多重環濠で囲まれた範囲は24haに達し、大陸との交渉を裏づける土器、青銅器、鉄器等が多数出土している。これらの出土は、それぞれ北部九州地域と朝鮮半島南岸地域との交流を裏づけるものであり、『魏志倭人伝』で「南北市糶」と表現された両地域との交流の実態を改めて確認することとなりました。

弥生時代 レビュー 大陸からの新しい技術・物資・人の流入による弥生文化の成立

鉄器の導入による大規模水田耕作の展開が社会をかえてゆく時代

- 前4世紀～後3世紀 土器の様式からふつう3期に区分される  
（ 早期 前10世紀頃～前5世紀 縄文晩期後半を遡らせて呼ぶ説もある ）
- ・ 前期…前4世紀～前2世紀 （前4世紀～前2世紀）
  - ・ 中期…前1世紀～後1世紀 （前1世紀）
  - ・ 後期…後2世紀～後3世紀 （後1～3世紀）

### 1. 水稲耕作の拡大

- (a) 水田農耕の開始(紀元前5～4世紀＝縄文時代晩期)  
夜臼式土器(縄文晩期の土器)と水田跡の共伴…例:板付遺跡(福岡県)・菜畑遺跡(佐賀県)
- (b) 前4世紀初めには西日本に水稲耕作を基礎とする弥生文化成立
- (c) 急速に西日本から東日本へ拡大(中期(前期末)には東北地方に達する、例:垂柳遺跡(青森県))

### 2. 金属器の使用…鉄器、青銅器の使用開始(ほぼ同時)

### 3. 大陸系磨製石器の登場

- (a) 伐採・加工用石斧…太型蛤刃石斧(伐採用)、加工用石斧(扁平片刃石斧(手斧用途)、柱状片刃石斧(鑿用途))・  
大型建築物の建築可能となり、高殿、楼閣建築の増加
- (b) 石包丁(石庖丁)…穂首刈り

### 4. 機織り技術

## ■ 鉄器がもたらした水田農耕と戦さの始まり 大規模灌漑を伴う水田耕作を可能とし、また 戦闘の武器になったのが、鉄器 日本のルーツ 日本人形成のルーツ探し

鉄器導入による大規模水田耕作の展開は生産量の増大と共に人口増をもたらし、それがさらに灌漑設備の導入・新規耕田の開発をもたらし、集団がますます大きくなる。また、大きな水田の広がりには 灌漑・水利の争いをも生み、川筋を中心とした集団が強力なリーダーの下にまとまってくる。

それが更なる地域間紛争を巻き起こし、国を生み 国と国の争いへと展開してゆく。

弥生時代は「争い」の時代であり、日本各地に国が形成されてゆく時代である。

大規模灌漑を伴う水田耕作を可能とし、また 戦闘の武器になったのが、鉄器である。

大陸・朝鮮半島からの鉄器を持った農耕集団の度重なる大規模な人の渡来が この変化を加速する。

水田稲作が日本に伝わったのは紀元前4,5世紀頃 鉄も早くに伝来したが、日本での製鉄・鉄製造は5,6世紀であり、鉄器の供給はそれまで朝鮮半島からの移入・供給に頼らざるを得なかった。当初 鉄は貴重品であり、水田耕作も木製や石の農具に頼らねばならなかったが、弥生の中期以降 朝鮮半島との交流が盛んになり、鉄製品が実用品として使われると共に水田農耕の生産性が向上。農耕集落・農耕社会での人口が爆発的に増加し、社会が変化してゆく。

そして、逆に鉄供給・支配が集団の力関係を大きく変え、大規模な国間の戦闘の時代に入ってゆく。

そんな中で 弥生後期には日本各地に数十の国が起こり、倭の大乱を経て 卑弥呼の時代へと入ってゆく。

「稲作」と「鉄」が日本に「戦さ」を持ち込んだといわれるゆえんである。

このように 時代を変えていった「稲作」と「鉄」そして それを持って日本へ渡ってきた渡来集団が日本各地で在来の集団と融合交流しつつ、農耕社会を形成して、弥生の時代が展開していった。

ひとえに「縄文人から 弥生人へ そして農耕社会が人口爆発を生み、そして 延々と大和の現代人が形作られていった」といわれる。  
最近の DNA 分析の展開の成果によると現在人の資質解析によると 多少それぞれのばらつきはあるにしろ 現代人は縄文人の資質 30% 残りの弥生人の資質 70%程度を受け継いでいるという。  
鉄が弥生の世界にどのように受け継がれ、社会がどのように変化していったかを考えることは 日本のルーツ 日本人形成のルーツ探しでもある。

## ■ 弥生時代 水田稲作

弥生後期 農具として 鉄器が使われるようになり生産性が大きく変化

### 1. 農具

- (a) 木製農具…鋤、鋤、えぶり、田下駄(湿田用)、大足(堆肥すき込み)、木臼・竪杵(脱穀用)
- (b) 石製農具…石包丁(穂首刈り) → 鉄鎌(後期)
- (c) 農具製造用の道具 (加工用)磨製石器→鉄製工具(斧・やりがんな・刀子)の使用(後期)

### 2. 水田 (一般的な流れ、当初から確立した技術が伝播したという説もあり)

- (a) 小区画水田 → より大規模な水田(灌漑・排水設備完備)
- (b) 湿田 → 乾田  
湿田…地下水位が高く、常に冠水しており、排水施設が必要  
乾田…地下水位が低く、通常は冠水していない、灌漑設備が必要(現在の水田)  
冠水していないため、有機物の分解が早く、栄養分が多い

## ■ 弥生の集落

### A. 住居

- (a) 竪穴(式)住居、高床(式)倉庫、平地式建物(いずれも掘立柱)の増加
- (b) 楼閣建築、高殿などの大型建築の出現…クニの支配者の住居、儀式の空間
- (c) 物見やぐら ←戦争の存在

- ・環濠集落の出現 例: 吉野ヶ里遺跡(佐賀県)、唐古・鍵遺跡(奈良県)、池上・曾根遺跡(大阪府)、大塚遺跡(神奈川県)、板付遺跡(福岡県)、原の辻遺跡(福岡県香岐)
- ・高地性集落の出現…例: 会下山遺跡(兵庫県)、紫雲出山遺跡(香川県)

## ■ 主要遺跡

1. 菜畑遺跡(佐賀県) 縄文晩期の水田跡検
2. 板付遺跡(福岡県)…前期、縄文晩期の水田跡検出
3. 垂柳遺跡(青森県)…中期の水田跡が検出、稲作は中期には青森まで伝播
4. 登呂遺跡(静岡県)…後期の代表的遺跡、戦後の考古学は本遺跡からスタート
5. 百間川遺跡群(岡山県)…田植えの跡の検出

### B. 集落

- (a) 縄文時代よりも大規模化  
拠点集落(環濠に囲まれるなどした大規模集落)の出現…クニの中心 通常は 20~30 戸か
- (b) 低地に営まれるようになる ←水稲耕作
- (c) 防御施設を備える集落の出現=戦争の存在